



第3章

「横浜の環境」の目指す姿

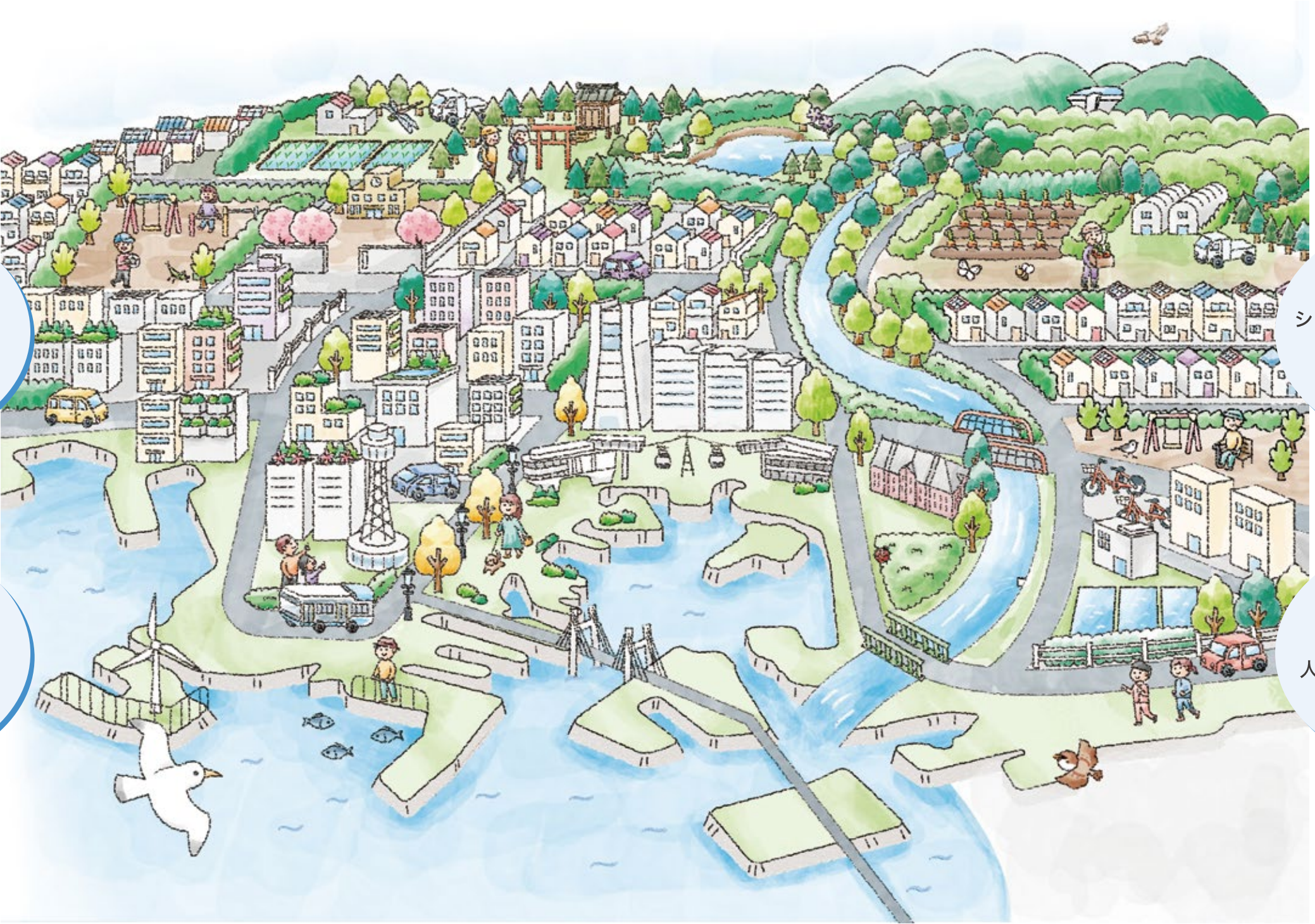
01 2040年の「横浜の環境」の目指す姿



横浜の環境の未来を考え、これまでの歩みを振り返り、現状を知ったとき、
私たちは、2040年の横浜の環境としてどのような姿を目指したらよいでしょうか。
自然が感じられ、多様な価値観が尊重され、精神的な豊かさを感じられる、経済も社会も環境と一緒に
よくなっていくまちを目指して、横浜の環境の目指す姿を4つの暮らしとして描きました。



「自然と共に自分らしく、心地よく暮らせるまち」



暮らし ①

気候変動に対応し、
脱炭素が日常や地域に
浸透している暮らし

暮らし ②

環境を賢明に保全・創出し、
自然の恵みを享受できる
健康で快適な暮らし

暮らし ③

シェアと循環の仕組みで築く、
人と自然に
ちょうどよい暮らし

暮らし ④

未来を育む
人と人とのつながりや学びに
あふれる暮らし

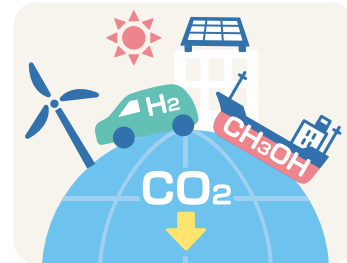
※これらイラストはあくまでイメージで、正確性を追求するものではありませんのでご注意ください。

暮らし 1

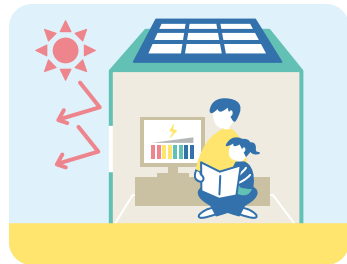
気候変動に対応し、脱炭素が日常や地域に浸透している暮らし

脱炭素が浸透している都市づくり

- 水と緑のネットワークによる風の道の確保や公園や街路樹の緑陰により暑さが和らぎ、涼しさがもたらされている。
- グリーンなモビリティの導入などによる脱炭素の交通ネットワークづくりが進んでいる。
- 徹底した省エネ、再エネの導入、エリアマネジメントなど、脱炭素が浸透した都市づくりが進んでいる。
- グリーンメタノールなどの次世代燃料供給体制の構築等や藻場・浅場の形成等による豊かな海づくりが進むなど、カーボンニュートラルポートの形成が進んでいる。
- 脱炭素経営が多くのビジネスの要件になっており、横浜にはこうしたテーマのスタートアップも多く集積し、モデル地域を中心に脱炭素が浸透した都市づくりが進んでいる。



脱炭素が浸透している暮らし



- 公共交通の利用を基本とし、必要に応じてカーシェアリングやレンタカーを利用している。なお、市内を走行している車はほとんど電動車だ。
- 製品ライフサイクルを通じた環境負荷が少ない商品を選んで購入している。
- 食品ロスによる廃棄物処理のエネルギー消費等を低減するため、食材は使い切り、外食時にも食べ残しはしていない。
- 再生可能エネルギー等が最大限活用され、日々の生活が環境へどれだけの負荷や貢献度があるか、わかりやすく数値化され、活用されている。

気候変動にしなやかに対応する社会

- 大雨が降ったとしても、治水対策が進み、昔ほど氾濫が起きにくくなった。また、ハザード情報を活用して早めに避難行動をとっている。
- 外出する際には、暑さに応じた外出時間の調整や市内に多数あるクールシェアスポットでの一時休憩など、熱中症予防対策が進んでいる。
- 気温上昇により感染症のリスクが高まったとしても、行政から発信される感染症に関する様々な情報を基に、感染症予防に努めている。



暮らし 2

環境を賢明に保全・創出し、自然の恵みを享受できる健康で快適な暮らし

健康に過ごせる心地よい暮らし

- 良好な生活環境が維持され、誰もが快適な環境を実感して、健康的な暮らしができています。
- 生活環境に関する分かりやすい情報をいつでも入手でき、安心して過ごしている。



自然とのつながりが感じられる暮らし



- 都市でありながら、市民生活の身近な場所に、豊かな水・みどり環境が存在しており、さまざまな生き物が生息・生育しているとともに、精神的な安らぎやレクリエーションの場を創出している。
- グリーンインフラの活用など、多様で豊かな自然の特性を生かした都市づくりが進んでいる。

生物多様性に配慮したライフスタイル・ビジネススタイル

- 地産地消やエコラベルのついた商品といった、生物多様性など環境に配慮した商品やサービスを選択し、購入している。
- 企業の多くが自らの活動による生物多様性への影響を分析、把握するとともに、生物多様性の保全や情報発信を行い、自然や生き物への負荷が少ない事業活動が進んでいる。



生物多様性が横浜の求心力に



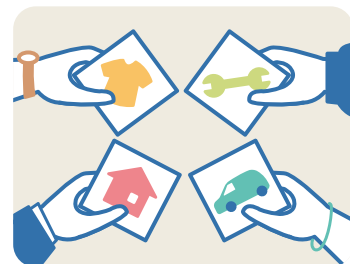
- 市民生活の身近な場所に、海や河川、公園、農地などが調和して存在する都市環境は、都市の価値を高め、多くの人々を惹きつけている。
- 希少な生物の保全に向けた取組や、市民や企業との協働による生物多様性の保全に向けた取組が、都市の魅力として高く評価され、さらに世界の生物多様性の保全にも貢献している。

暮らし 3

シェアと循環の仕組みで築く、
人と自然にちょうどよい暮らし

資源が効率的に循環し、環境への負荷をかけずに発展する社会へ

- 循環経済(サーキュラーエコノミー)へと移行し、新たな資源の投入や消費が抑えられ、資源・エネルギーの無駄がない生活が可能となっている。
- プラスチックリサイクルの拡大や、バイオマス、未利用資源の活用など資源の循環利用や代替素材の導入が進んでいる。
- シェアリングエコノミーが社会に浸透し、物だけでなく、場所やスキルなども共有されている。



持続可能なビジネスで市内経済が活性化



- 事業者は製品やサービスのライフサイクル全体を考え、長期利用やリサイクル、リユース、シェアといった環境への配慮を前提としたビジネスモデルを採用している。
- 豊富な住宅ストックや、農地と消費地が近いなど、横浜ならではの特徴を生かしながら横浜らしい循環型の暮らしを送っている。
- サーキュラーエコノミーが横浜の新たな成長産業となるとともに、アジアを代表するグリーンシティとして、世界の環境政策、都市政策を先導している。

循環の価値への共感が広がり、つながりのあるコミュニティで暮らす

- 市民はシェアやレンタル、リユースをはじめとした消費スタイルを選び、ごみになるべく出さずに快適に、多様なサービスを利用しながら暮らしている。
- 地域での環境活動やシェアリングエコノミーが広がり、コミュニティの連帯感が強まっている。



暮らし 4

未来を育む人と人との
つながりや学びにあふれる暮らし

未来に向けて行動できる人に

- 学校や職場、地域などのあらゆる場で地域や地球の環境課題について学び、考える機会があり、各自が環境課題を自分ごととして考え、地球の未来に向けて行動している。
- 体験や活動の機会が多く、環境に対する理解が深まり、行動変容や活動の広がりにつながっている。



つながりが〇〇を生む



- 市民・企業・行政と一緒に環境課題に向き合い、対話することで、新しい発想・技術・つながりが生まれ、環境課題の解決に向かって共に進んでいる。
- 人と人がつながり、一緒に考え、取り組むことで、知識・ノウハウ・考え方・活動の場・手段などが効率的に共有され、意見を交わすことで新たなアイデアが生まれている。

横浜に関わる全ての人が環境の担い手となる

- 「環境」のことは関係する人たちがするものという意識ではなく、全ての人が、日常生活や企業活動、行政政策の中で、環境にやさしいライフスタイルやビジネススタイルを実践し、環境を支える人になっている。

